

め、子宮鏡および内膜生検にて慢性子宮内膜炎の所見を認めた。頸管狭窄に伴う月経血遺残を生じていたことから、子宮内環境悪化による着床障害や精子機能低下を疑い、月経終了時に子宮内洗浄を施行したのちに AIH を行ったところ、2回連続して妊娠成立した。1回目は6週で流産し、2回目は16週で破水し死産となった。本症例は、月経血貯留に伴う内膜炎、あるいは月経血貯留そのものが不妊の原因となりうる可能性を示した。

20. 広汎子宮頸部摘出術後の頸管狭窄に伴う不妊に対し子宮内洗浄を行い妊娠成立し得た一例

静岡赤十字病院 産婦人科

○松田 理沙、加藤 恵、市川 義一、地阪 光代、小谷 倫子、  
栗原 みずき、根本 泰子

広汎子宮頸部摘出術 (Radical trachelectomy : 以下 RT) の術後合併症として、不妊や流産の増加が知られる。頸管狭窄や頸管長短縮に伴う粘液減少による精子通過障害や、バリア低下による感染の関与が考えられている。今回、RT後の月経血貯留・子宮内膜炎に対し子宮内洗浄を行い、妊娠成立した例を経験した。症例は39歳、5妊1産 (28歳 自然妊娠 帝王切開、34歳 流産、36歳 19週で破水し帝王切開、36・38歳 流産)。子宮頸癌 I B1 期に対し RT を施行され、2年後に生児を得たが、その後反復流産および続発性不妊を生じた。人工授精 (以下 AIH) 3回目で妊娠したが流産し、その後 AIH を2回行うも妊娠に至らなかった。排卵前の経腔超音波検査にて子宮内膜の高エコー像を認